

様式第4号（第9条関係）

平成29年7月7日

小野市議会議長 山中 修己 様

派遣議員 河島 三奈 ㊦

### 議員派遣報告書

先般、実施しました議員派遣について下記のとおり報告いたします。

#### 記

- 1 派遣日 平成29年7月5日（水）
- 2 派遣議員 河島三奈
- 3 派遣先 神戸市中央区 ラッセホール2階「ローズサルーン」
- 4 内 容 災害時のトイレの重要性と被災者の健康について
- 5 所 感  
「講演のテーマと講師」  
講演1 「避難所について～トイレの確保・管理を中心に～」  
内閣府政策統括官（防災担当）付参事官（被災者行政担当）  
付参事官補佐 石田耕一 氏  
講演2 「避難所の環境衛生対策～感染症から身を守る～」  
東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科 感染制御学  
教授 菅原えりさ 氏  
講演3 「熊本地震に学ぶ今後のトイレ対策」  
特定非営利活動法人日本トイレ研究所  
代表理事 加藤篤 氏

廃棄物適正処理推進大会の中での講演だったので、講演開始前には、主催者である兵庫県環境整備事業協働組合の理事長から挨拶があり、その中で、被災した場所の環境衛生はとても重要であることと、廃棄物を処理するという事業に関して自治体の予算の有無や、当該地域の民間廃棄物処理業者などの思惑が動き、「被災者を助ける」という観点が欠けているように感じるとの言葉があった。現場の第一線で働いている方の言葉であったので大変な説得力があり、行政に近い立場でまちづくりや、機能チェック等をしている身としては認めたくはないがそういう部分もあるのだなと実感した。

第1部の講演の内容は主にガイドラインや規則、法令のことについて「指定緊急避難場所」「指定避難場所」の違い、避難所における必要措置や事前準備の大切さ等を聞いた。法令等には「努めなければいけない」「市町村判断により指定」「義務付けられるわけではないが」などの文言が多く、災害については各地域の特色・事情があるので一概に言いきれるものではないと理解はしているが、少しすっきりしないと感じた。しかしながら20年前の阪神・淡路大震災の頃よりは格段に法整備が進んでおり、市町村レベルでの「福祉避難所の指定」を義務付けてはいないが確保・体制を整えることが法令上に位置付けられたことがその最たるものではないかと感じた。

今まで災害時のシミュレーションや避難所運営をどうするのかなど、議論の俎上にはあがっていたが、トイレ、すなわち排泄のことはあまりスポットが当たらなかったと思う。確かに排泄するということは人間が生きていく上で欠かせないものであり、精神面・心理面にも大きく影響するところである。避難所でトイレに行きたくないがために、水分補給を制限しその結果エコノミー症候群のように二次健康被害を発症する事例が増えている。その大半は女性であり、災害時の直接的な死亡事案より、関連死事案が多いことの説明にもなる。食べることよりも出すことのほうに目を向けるべきであると思いなおした内容であった。

第2部の講演は、主に避難所における感染症の予防の話で、避難所という非日常的な場所に、健康状態の悪いまたは弱い方がすし詰め状態になっているなかで、「感染」を防ぐことが重要であるとの内容だった。

病気を発症したり、汚染をしても隔離措置や適切な対応処置をとれば、感染はしない。ということで、避難所の中に隔離部屋にできるような小部屋などをあらかじめ定めておく必要がある、これは第1部の講演内容にもあったが、事前準備になる。避難所の指定を受ける建物の空間配置図を用意し、そのなかで部屋ごとに役割を設け、仕切る。そして避難者の健康状態を把握し、統一のフォーマットに記録する。この計画がとても大切だが準備するには大変である。ここは、行政が舵をとって事前準備を各自治会に進めていかねばならない所だろうと感じた。

また、「水」の大切さを改めて実感した。飲み水としての感覚が大きかったが、体、主に手を清潔に保つための水が必要だということである。今後は備蓄品の中で衛生用品の優先度を上げる必要があると感じた。

過去の災害時での避難所の中で広がった健康被害は、インフルエンザなどの病気ではなく、黄色ブドウ球菌による食中毒が原因だったことが把握されている。救援物資を配る時や、炊き出しなどの際にボランティアが素手で食べ物を触ったりした場合に広がる恐れがあるため、ボランティアに来てくれる方々に対する衛生指導も欠かせない。また、医療チームは基本受身の体制で、発症してから活動することが多いが、本当に大切なのは避難所が開設された当初からの健康チェックである。今後の官民連携の政策を進めていく中での課題であると感じた。

第3部では主に災害時でのトイレの在り方についてで、実際の避難所のトイレの様子の写真を見ながら、対策を聞いた。写真とはいえ実際に見た避難所のトイレは汚物があふれ最悪な状態だった。写真だから匂いはしないが、実際あのトイレが建物の中にあつたら悲惨だと思う。まず、誰が清掃するのか、管理するのか。トイレの構造を把握している人がどれだけいるのかなど、早急に決めなければいけないことと感じた。

ここ30年ほどでトイレの水洗化が急激に進み、排泄物は水に流して当たり前と日本人なら感じているのだろうと思う。かくゆう私もそうで、水が出ない、電気が来ないと処理できないという感覚がなかった。ここは、老若男女すべての方に啓発、警告するべきであると感じた。話の中で「避難所においてトイレを設置しているだけでは駄目。使ってもらえなければ意味がない」との言葉が出、計画だけではなく、実践も含まなければいけないと感じた。例としては特に学校、イベント時や訓練の際、

携帯トイレや簡易トイレを実際に使用することも必要になってくると思う。なお、その際に出た廃棄物は分別をし、どのルートで廃棄するのかなども決めておかなければいけないところであろう。

また、非常時に使用する災害用トイレの分類名称を統一することが大切でこれは、全国的に進んでいる最中であるらしい。確かに物品の名称が統一でなければ「こんなはずではなかった」ということになり、引いては効率化の低下を招きかねない。

最後に講師がイタリアに視察に行かれた話があり、災害時のトイレの写真が示された。立派な水洗トイレで設置も早く利便性も高い清潔なもので、ここに国民性が表れているということだった。いわく「食べること」「眠ること」「排泄すること」は「生きる」ということそのものである。そこに「快適さ」を求めることは「贅沢なこと」ではない。この一言がこの日一番心に残った言葉だった。